

窓辺

女性と管理職

おだぎともこ
小田木朝子

私は小さな事業部のリーダーをしています。一般には管理職。子どもを持つ女性5人のチームです。

今、女性が管理職を引き受けたがらないという話をよく聞きます。以前の私もそうでした。仕事は好きでした。子育てとの両立は大変だけど、誰かの役に立つ実感や、恵まれた仲間がいて毎日充実していました。

尊敬する上司に引っ張られる安心感があり、目の前のことに集中できる環境。「ずっとプレーヤーでした」

い」と思っていました。

34歳の時、より責任あるポジションにチャレンジしないかと打診され、私は「今で十分」と本心を伝えました。当時、長女は3歳。できる自信もありませんでした。

しかし、上司が言いました。「経験と能力が上がれば、求められる役割も変わる。その時々々の役割を引き受けないとね」

管理職になることが、《担うべき役割を引き受けること》という発想が、私にはありませんでした。役割

はその役割に応じて付けてくるもの。期待される役割を果たそうと努力するうちに、経験によって成長し、その役割に見合う力と役割が後に付く。上司の言葉で考えが変わりました。

与えられるものだった「やりがい」と「環境」は、自分でつくるものだったのです。結果どうなったか。端的に言うと、仕事はいつでも面白くなりました。大変でないか？と問われませんが、仕事ならどこにでもある大変さがあっただけです。役割が上がる時、多少の大変さは乗り越える力が付いています。女性の皆さん、ご心配なく！

(育勉普及協会理事)